

レーザーコンパス

偶 感

晝馬輝夫*

Teruo HIRUMA*

浜松ホトニクス株式会社は創立以来40年を経過したので何か記念事業をやらうと色々考えたが、結局平凡に40年の社史を作らうという話になりました。40年も経つと最初の頃入社した人等何人かが定年退職するので、主としてその人等に昔の思い出を基に古い記録や写真や、またそれぞれの関係者に話を聞いて、どうやら苦勞の結晶が出来つつある様であります。

20年位前の話です。当時名大におられた某先生がある日学生さんと一緒に我が社を訪問され、学生さんは大事そうに箱を抱えておられたとの事です。対応に出た現弊社常務取締役中央研究所長の鈴木義二の話によりますと、この先生、長年要求してきた大枚の予算がようやく通り、やっと手に入れたRCAのストリークチューブを机からころげ落として割ってしまったので修理してほしい、という切なる御要望でありました。光電子放出面の入っている電子管は、破損した所をガラス細工で補修して、中の空気を真空ポンプで抜いて真空管にしても、肝心の光電面は回復しない、その為には全く新しく作らねばならないが、我が社にはRCAのストリーク管と同一のものを作る準備がない、という事を御説明申し上げると、御両人は最後の望みも断たれたという感じで大変落胆され、見るのもお気の毒の御様子でありました。そこで鈴木は、これと同一の型のものは出来ないが、同じ様な働きをするものを作ってみましょう、と執り成して、とにかく使えるか使えないか分からない

が、数ヶ月で作り上げたという事がありました。

その後国内でいろいろあったとの事ではありますが、1年位後、英国のブライトンで第1回だったと思いますが、オプトエレクトロニクスの展示会・コンファレンスがあり我が社もブースを出す事にして、小生もこれにアテンドするべく準備をしていました。その頃までにはHTV(当時我が社名は浜松テレビでありました)製のマイクロチャンネルプレート入りのストリークチューブが出来ておりましたので、それを1本もって、そのスペックみたいなものを10枚程ゼロックスコピーとを持ってブライトンに行ったわけでした。誰もこんなものに興味を持つ人はいないだろうと思っていた所、10枚のデータシートはすぐなくなり、慌てて事務局の女性に頼みこんで数十枚のコピーを作ってもらった位でした。その中の一人にローレスリバモールのラモールマン教授がおられ、帰途にどうしてもリバモーへ寄れとの事でロンドンから日本への帰り道?にリバモーへ寄り、いろいろ見せて戴き、その上大事な技術だから、カメラにして持って来いとお話でした。当時我が社にはピコ秒のレーザー等なく調整・検査が出来ないと申し上げると、持って来れば全部協力してやるからという事で、急いで2ヶ月でカメラを作りこれを担当した土屋君と持ち込んで、1週間いろいろテストしたり部品を貰ったりして、とにかく数十ピコ秒の分解能を証する写真を貰って日本へ帰ったものでした。この写真をもとに日本国内

* 浜松ホトニクス株式会社(〒430 浜松市砂山町325-6)

* Hamamatsu Photonics K.K. (325-6, Sunayama-cho, Hamamatsu, 430 Japan)

(716)

偶 感

平成6年9月

でストリークカメラの販売を始めたものであります。

あれから20年、今ではレーザー核融合が本物になりつつあり、またフェムト秒測光が新しい物性を開き始めつつあるを見ると、全く感慨無量なるものを覚える次第であります。

しかしながら、現在の技術はまだ不十分で光の持つ全特性の0.1%位しか人類は知らないのではないかと感じております。全人類、全宇宙のために各位の奮闘努力を大いに期待する次第であります。